

歴史と地名

中 林 幸 夫

（会員・佐伯市長島町）

昔々は地名は無かった。なかったというより必要が無かった。人間が歩くだけの生活範囲で生活するならば、山は山、川は川でよく、地名など必要がない。しかし、段々と行動範囲が広がるにつれて、交易や他の地域の人々との出会いが始まり、地名が必要になった。

佐伯市に住む人には「大入島」は「オオニュージマ」であって、何の疑問も感じないが、外部の人からは「何と読むのか」と聞かれることが多い。「オオイリジマ」「ダイニューウトウ」と呼ぶ人が多く、「オオニュージマ」と読む人はめったにいない。音訓からすると、日本語的に「オオニュージマ」と読めないからだろう。

そこで、大入島の呼び方の起源を調べたが分からなかった。あれこれ書物を調べていると、以前大入島は大八島（オオヤシマ）と呼んでいたらしいことが分かった。

前に、私が本誌第一四一号で、大入島の北にある島の呼び名が現在の地図上で官島（カントウ）・宮島（ミヤジマ）の二通りがあり、調べてみると、昔の登記台帳に筆で書かれているのが達筆のため、官とも宮とも読めることに原因があることがわかった。

このことを思い出してみると、大八島が大入島になったことは推測できる。書いた人、読んだ人の責任で地名が変わったとはおかしなことだが、それほど大入島の地名が必要ではなかったのかも知れない。

大入島であったことを説明するなら、鶴見町の松浦港沖約二キロメートルに八島があり、その沖に大八島があることになる。と自然的であり、これを名付けたのが松浦地域の人だとすれば、この地名は古いものと考えられる。それは、鶴見町で松浦地方は早くから開けた地域と思わ

れるからである。

松浦の由来は、ヤマタイ国で有名な古書『魏志倭人伝』に末盧（まつら）の名があり、その分かれをくむものと思われるからである。

この近くの古い地名の中に、穂門の郷というのが『豊後国風土記』に出てくる。それによると、穂門の郷（ほとのと）は海部（あまべ）の南の地域とされており、その名残が保戸島のようなものであるが、上浦町の蒲戸崎もその名残と思われる。蒲戸（かまと）も、昔記録をした人は、蒲戸崎（ほとさき）と書いたと思われる。

この「蒲」という字は、本来、「ほ」と読むのが正しい。蒲戸が所在する所は、現在の上浦町大字最勝海浦（にいなめうら）字蒲戸浦である。

最勝海浦の地名の起りは、景行天皇が海藻（ほつめ）を取れと言われたことに起因していると伝えられており、『豊後風土記』には、

海底 多生海藻 而長美

天皇 即 勅日取 最勝海

と記されている。

では、どうして最勝海が「にいなめ」と読めるのか。

どの字が「に・い・な・め」なのかさえはっきりしない。

最勝（この上もなく優れていること）海の語源と、新嘗（新しく取れた穀物を神に供える祭）の語源は全く別のもので、後生になってこの二つをひとつにして「にいなめ」と読ませたと思われるが推測はむづかしい。その証拠に、文久三年の豊後国村明細帳、落野浦村（現津久見市四浦と上浦町最勝海浦近辺）の中に、

高浜・間本・田野浦・大本（大元）・深良津・久保泊御清嶋（沖吉島）・陶蔵・福泊・地下等の地名を見るととはできるが、最勝海の名はない。

佐伯湾口の鶴見町大島も、昔は沖の島と呼ばれていたようで、大島となり、人が住むようになったのは後生になつてのように言われている。

佐伯史談会の実施しているリーフデ号漂着地の地名シヤチバイも、時の流れで変化して、今は思わぬ地名になっているかもしれない。

リーフデ号のことを頭の角にしていると、最初に漂着した所に地元の小船が多数来て、品物を盗んだのだとの記録があるが、当時、この近くで船を多数所有していた地域はどこだろうと考えると、落野浦村辺りではな

かろうかと思う。

村明細帳によれば、文久三年に落野浦村には、廻船五隻、三枚帆一二隻、小舟百三隻があったとの記録がある。

(比較 津久見村―廻船一隻、小舟一七隻)。

リーフデ号は臼杵まで曳航されたとのことであるが、

曳航には多数の舟を必要としたことだろう。

先人の記録を掘り起こすため夏の浜を歩く。海岸では

黒く日焼けした老婆がテングサを集めていた。

炎天下 生きて汗ふく 老婆かな

